

「消化管の病理学」 第2版

藤盛 孝博 著

癌研有明病院院長

武 藤 徹一郎

まことにユニークで役に立つ病理学の本が出版されたものである。2004年5月に第1版が上梓された時から、この日を機して3年半の準備を積み重ねた上での第2版出版となった。その意気や好し、当然のことながら内容は好評であった第1版にも増して充実したものとなっている。消化管臨床医を対象に書かれているだけに、美しい精選された写真が多くてとにかくわかりやすい。写真を見ているだけで楽しくなってくるのは、形態学が得意な人にとってはたまらない贈り物である。のみならず、消化管病理を志す人々にも大変役に立つ専門性を含んだ成書でもある。

本書は10章から構成されている。第1章は切除標本と生検の取り扱いで、極めて实际的に注意事項が記載されている。第2章は大腸SM癌の取り扱いの要点が、かなり専門的な問題も含めて詳しく述べられている。実地に詳しい筆者がかなり力を注いだ部分であることがわかる。第3章に間葉系腫瘍と類似病変の病理アトラスとして、珍しい13症例が提示されている。この辺の構成がいかに筆者らしくユニークなのである。第4章から第8章までは病理組織診断として口腔、食道、胃、小腸、大腸(肛門管を含む)が順序よく記述されている。口腔病変ならび

に肛門管病変についても記載があるのも、いかにも筆者らしくユニークなところである。筆者が序文で自ら述べているように、colitic cancerにはかなり力を注いで記載していることがわかる。著者の幅広い交友関係を反映して、数多くの優れた臨床家の協力を得たおかげで、教育的な症例が多数提示されているのは特筆すべきであろう。掲載されている写真はいずれも症例選択が的確で美しく、この分野の経験に乏しい医師にとっては非常に参考になると思う。全体的にみてもどの写真も質が高く、著者の病理学者としての自負がうかがわれる。何度見直してみても“?”がつく写真は1枚もない。

本書の最大の特徴の1つは第9章と第10章の存在であろう。第9章では消化管病理に必要な発生と正常組織が正常組織アトラスとともに詳しく述べられている。しかし、本書の最もユニークな所は第10章の「消化管病理に必要な基礎的染色法と遺伝子診断に関連する技術」の記載であると評者は思う。分子生物学の得意な筆者の面目躍如な章であると言うべきであろう。HE染色から始まって、PAS染色、アルシアンブルー+PAS染色、エラスチカ・ヴァン・ギーソン染色、グリメリウス染色、ギムザ染色、ワルチン-スタリー染色、免疫染色の染色手順が

詳しく記載されているだけでなく、日常使われている遺伝子診断(結核に対するPCR-RFLP, ras, p53, c-kit 変異, IgH 再構成)のプロトコールも記載されているのは大変ユニークである。今やこれらの技術は実地病理診断の場でも要求されるものとなっていることを考慮しての章である。この2章は従来の消化管病理の成書にはみられない興味深い構成であり、病理に興味のある消化管臨床家、病理医を志す人々を対象にした筆者の本書執筆の意図が明確に示されている。

以上述べてきたように、本書は病理診断医であると同時に病理学の研究者としての筆者の経験と知識を総動員して、消化管臨床医と病理医を志す人々のために指針を示したものであり、実用的であり日々の診療に役立つ素晴らしい内容を含んだ本となった。何度も繰り返すが、掲載されている写真はいずれも精選された質の高いものばかりであり、説明に用いられている図表も適切なものばかりである。消化管専門医、消化管病理専門医を志す人々にとって必読の書であり、座右の書として一読を薦めたい。

●B5 頁312 2008年 定価12,600円
(本体12,000円+税5%)

医学書院 刊(☎03-3817-5657)